

# 交通事故はなぜ なくなるのか

リスクを  
とる心

第2回

## リスクとは、マネジメントとは

立教大学現代心理学部教授 芳賀 繁

前回、「交通行動はリスクマネジメントだ」と書きました。では、リスクとは何でしょう。今回は、リスクについて考えてみたいと思います。そして、リスクをマネジメントするとはどういうことなのかもお話します。

### 結果がわからないからリスクが生じる

リスクの定義にはいろいろありますが、一番短いものは「結果の不確実性」です。結果が決まっている事柄にはリスクはなく、結果がわからないからリスクがあるということになります。

例えば、100万円で株を買えば、株が値上がりして元金が減ってしまう可能性があります。しかし、この100万円を銀行に預ければ、元金が減ることはありません。だから、株にはリスクがあり、銀行預金にはリスクがないと言われるのです。もちろん、今の経済は不安定ですから、銀行がつぶれるかもしれません。「リスクがない」わけではなく、「リスクが非常に小さい」というのが正確な表現でしょう。

結果が不確実ということは、予想がしにくい、予想が外れることがあるということでもあります。天気予報のようなものですね。

週間予報によれば、今日の日曜は晴れるからピクニックをしようと決めたとします。友達を誘って、バーベキューの材料を買い、前日洗車

をしてクルマに道具を積み込み、楽しみにして朝起きたら雨が降っていた。バーベキューのために自分1人では食べきれない量の食材を買うことや、洗車や道具の積み込みに時間と労力を使うことには、リスクが伴うのです。なぜなら天気という不確実な事象によって、無駄な出費や無駄働きになる可能性があるからです。

天気予報が「曇りのち雨」のとき、皆さんは傘を持って出かけますか？傘を持たずに出かけると雨に降られるリスクもあるし、傘を持って出かけて無駄な荷物を一日持ち歩くだけに終わるリスクもあります。忘れ物が得意な私の場合、傘を電車で忘れてなくすリスクもあります。

自動車を運転して出かける場合、無事に目的地に着くことは残念ながら絶対確実ではありません。だからクルマの運転はリスク行動なのです。

### リスクの大きさ

「結果の不確実性」といっても、リスクはすべて「悪い結果」に関連するものばかりのようです。株が予想以上に値上がりして儲かるリスクとか、天気予報が雨だったのに晴れてピクニックが楽しめるリスクとかは言いませんよね。したがって、「悪い結果が起こる可能性」と定義したほうがよいかもしれません。（多くの文献では「望ましくない結果が起こる可能性」と

定義しており、そのほうが、より正確な表現ですが、ここでは、わかりやすくして簡潔な「悪い結果」という表現を使います。

「悪い結果」には、「少しだけ悪い結果」から「非常に悪い結果」まで、いろいろなレベルがあります。夏に弱い雨に濡れるのは少し悪い結果ですが、冬にずぶ濡れになるのは相当悪い結果です。交通事故で命を落とすことは、非常に悪い結果です。

「可能性」にもいろいろなレベルがあります。「めったにない」から「ほとんど確実にある」まで、確率の高い低いで表すことができます。ちなみに、気象庁が降水確率を発表するようになったのは1980年だそうです。

リスクが「悪い結果が起こる可能性」ならば、リスクの程度は、悪い結果の大きさと、それが起きる確率で、おおざっぱに表すことができます（図1）。実際、保険会社や証券会社で働くリスクの専門家の多くは、「リスク＝損害額×損害の生じる確率」と考えています。

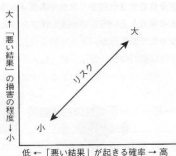


図1

## 「リスク＝危険」ではない

「悪い結果が起きる可能性」というのは「危険」と同義語なのでしょうか。たいていの文脈で使われている「リスク」という言葉は、そのまま「危険」または「危険性」という言葉に置き換えられるように思われます。

「交通事故に遭うリスク」、「株で損をするリスク」、「手術のリスク」、「エックス線に被ばくするリスク」、「食品添加物のリスク」。ために、それぞれの「リスク」を「危険性」に取り換えて読んでみてください。問題なさそうですね。

では危険は避けるべきものですから、リスクも避けるべきものと考えてよいのでしょうか。「あたりまえだろう」と言う読者が多そうですが、ちょっと待ってください。自動車交通、株、手術、エックス線、食品添加物、どれも私たちの暮らしや、産業、医療、食生活になくてはならないものばかりです。つまり、リスクの裏側には「ベネフィット」があるのです（というより、こっちを表側と呼ぶべきですね）。手術は危険であっても、放っておけば苦しい状態が続いたり、病気が悪化したり、死んでしまったりする人が、手術で助かる可能性がある（たいていの手術はその可能性が高いから行われます。エックス線は危険ですが、このおかげで、いろいろな病気が診断でき、適切な治療を行うことができるし、癌が早期に発見されて命が助かる人も多いのです。食品添加物は使わないほうがいいと思っている人がいますが、使わなければ使わないことによるさまざまなリスクを生むことを知るべきです。

実は私は、リスクという概念は保険業界か証券業界で発展したものだと思っていたのですが、京都大学名誉教授で元京大医学部長の菅原努先生によると、放射線研究が「リスクの考え方」を生んだんだそうです（『「安全」のためのリスク学入門』、昭和堂参照）。

1895年にレントゲンがエックス線を発見して数年もたないうちに、エックス線を使った透視技術は、戦争で銃弾に倒れた兵士の手術に絶大な威力を発揮しただけでなく、皮膚疾患や皮膚癌に放射線を当てると治療効果があることもわかりました。一時は、リウマチや結核の治療にまで使われたそうです。しかし、間もなくエックス線をはじめとする放射線による健康被害も出はじめました。役に立つが危険もある放射線を、どのくらい浴びても安全なのか。いや、「安全」などということはありません。少しでも浴びれば、少しだけ痛くなる可能性が高まる。しかし、自然界にも存在して誰もが少しは被ばくしているのだし、こんなに役に立つものなのだから、利用を禁止することはかえって人類・社会のためにならない。ならば、どれくらいなら被ばくを許容できるのかという観点で基準を決めよう、というのが「リスクの考え方」なのです。そして、放射線をどのようにして測定し、被ばくのリスクをどのように評価するかについての研究が進みました。

つまり、ベネフィットも危険も両方あるものについて、危険の程度を客観的に見積り、ある程度の危険を受け入れつつベネフィットを上手に利用するために、「リスク」という概念が生まれたのです。

## 「マネージ」とは「やりくりする」こと

自動車为社会にも個人にも多くのベネフィットをもたらすものであることは論をまちませぬ。自動車が危険だから禁止すべきだと主張する人は、よほど過激な反文明主義者だけでしょう。自動車のベネフィットを享受するためには、否応なく交通事故のリスクを受け入れなければなりません。しかし、自分が事故の被害者になるのも加害者になるのも嫌に決まっているし、社会全体としても、事故をできるだけ少なくしたいと思っています。

「マネジメント」とは「管理」とか「経営」と訳されますが、「マネージ」という動詞は、もともと「何とかやりくりしてやり遂げる、(扱いにくい人・物・事を)うまく取り扱う」という意味です。ですから、「リスクマネジメント」というのは、リスクの存在を認め、必要ならばある程度は受け入れつつ、ベネフィットを求めてやりくりすることなのです。「ドライビングを含む交通行動をリスクマネジメントととらえる視点」というものが少しイメージしやすくなったでしょうか。

